
コラム 1

「アンティークジュエリーの魅力と楽しみ」

話し手：山口遼氏（宝飾史家）

「いわゆる“ジュエリー”には興味がないけど、アンティークジュエリーは好きだわ」という方は、意外に多いように思います。

アンティークジュエリーとは何か、その魅力は？ 買うときはどこを見たらよいでしょう？ そんな素朴な疑問のアレコレを、日本におけるアンティークジュエリーの第一人者として知られる山口遼さんにお話しいただきました。



やまぐち・りょう

北海道生れ。同志社大学卒業後、ミキモトに入社、常務取締役・営業本部長を経て退任後、アンティークジュエリーの研究と販売に従事。真珠および宝飾品史の専門家として、各種学校での講義を行うかたわら、ダイヤモンド、プラチナ、ゴールド、それぞれの世界コンテストの審査員を務める。著書に『ブランドジュエリー30 の物語』『日本のトップジュエラー』、訳書に『著名なダイヤモンドの歴史』などがある。趣味はジュエリーに関する図書蒐集、約 2500 冊を所有。

アンティークジュエリーに「なんじゃこりゃあ！」

……それまで現代のジュエリーを扱っていらした山口さんが、アンティークジュエリーに惹かれたきっかけはなんでしょう？

ヨーロッパに出張していた時、時間があればあちこちの美術館を訪ね歩きました。そこにはもう死ぬほど、膨大な数のジュエリーが展示されていることに驚きました。

日本では今でも、ジュエリーというのは金持ち女の遊びであるという風潮がありますね。しかし西洋の美術館で見たものは、日本で見ているジュエリーとは大きく違う。それぞれに個性がある。面白い。なんじゃこりゃあ！ と思いました。

調べてみると、17世紀以前の西欧の美術界には「金工」という分野があつて、絵画や彫刻、音楽と同じく、芸術のひとつだったんですね。金工師は絵描きや彫刻家と同じように、芸術家と見なされていました。なるほど、小さな地方都市の美術館にもジュエリーがごちゃまんと納められているのは、芸術品として見られていたからなのか、と腑に落ちました。

……アンティークジュエリーに「なんじゃこりゃあ！」と衝撃を受けたのは、具体的にはどんなところですか？

いろいろな意味で面白いですよ。

ジュエリーを構成する要素は「素材、デザイン、つくり」です。アンティークジュエリーはその3つすべてが、現代のジュエリーとは違う。違うという意味は、昔のほうがはるかにちゃんとしている。

技術というものは、ふつうは進歩していくものですが、ジュエリーにおいては、昔できていたのに今はできないことも多い。「これどうやってつくったの？」と分からないほど精巧なものや、ジュエリーに込められた意味を知ると、非常に感心するものが数多あります。

……そもそも、アンティークジュエリーとは、どういうものを指すのでしょうか。

いま、われわれが「アンティークジュエリー」と言っているのは、基本的に100年前のものです。18世紀の後半から19世紀前半、大衆に向けて売られていたジュエリーです。

「大衆」といっても、われわれ日本人が考えるような大衆じゃありませんよ。1770年代に、イギリスでは産業革命がおこり、ごく普通の平民の中から事業が成功して大金持ちになる人があらわれました。このお金持ちたちが当時の大衆です。彼らが妻や愛人にジュエリーを買って与えたことで、ジュエリーのすそ野が一気に広がりました。現代の宝石業界の始まりです。

そういう成り立ちで登場した大衆なので、現代でいうところの大衆とはレベルが全然違うし、ジュエリーに期待するレベルも違います。1920～30年頃までは、つくる側も着ける側も、一種の根性を見せ合っているような時代でしたね。

つくりの面でいうと、おそろしく精密です。職人魂がはっきりとあらわれていて、ここは手を抜けばいいじゃないと思う箇所でも抜いていない。そういうジュエリーがゴロゴロある。

たとえばこの（アンティークの）真珠のバングル。小さな天然真珠の端を切り落として底を平らにしたものを、ひとつひとつ埋め込んでいます。真珠を丸いままセ

ットすることで、上に飛び出るのを嫌ったんですね。小さい真珠だと直径1～2ミリです。現代でもできないことはないけれど、手間がおそろしくたいへん。まずやらないでしょう。



アンティークの真珠のバングル。真珠の下面を平らに切り落としてセットしている。

こちらはネックレス。半貴石をひとつひとつ爪留めしています。これだけの長さがありますから、たいへんな労力です。地金は金ではなくて18世紀よりも少し前の時代に生まれた、ピンチベックという、銅や亜鉛の合金です。金はまったく入っていません。でもパッと見、分からないでしょう？ 僕も分からない。外見的には一番金に似た金属といわれています。錆びないし、変色もしない。

もしこの長さのネックレスを18金でつくったらえらい値段になってしまうので、値段は抑えて、それでいて美しく仕上げるにはどうしたらいいか、知恵を絞ったんでしょうね。ジュエリーではふつうあり得ないような、「ピンチベック」という金属を引っ張りだしてきてこしらえた。19世紀の大衆というのは貴族とは違って、そこまでお金があるわけではないですから。



金に最も似た合金、ピンチベックを使った半貴石のロングネックレス。

面白さ、こだわりを求める人におススメ

……アンティークジュエリーを着ける楽しみは、どこにあると思われませんか？

人と同じものが嫌いという人にはすごくいい。1900年以前のは、少なくとも受注生産で、店舗が自主的につくって並べているものではない。今みたいに、新作を100個生産しました、沖縄から旭川まで全県の店舗で売っているということはまずない。

それから、ジュエリーの一つ一つにエピソードがあります。教養を評価する人に向けたジュエリーだと思いますよ。

たとえばこのブローチ。今から**100**年前のヴィクトリア時代のものです。この時代は平均寿命**30**何歳、**1**人から子どもが**6**人生まれるのがふつうです。周りは親戚だらけで、年がら年中葬式がありました。

だから、葬式用のジュエリーが非常に発達したんですね。ヴィクトリア時代はとても偽善的な建前社会です。葬式が大切な儀式で、お母さんや子供が死んだら1年間喪に服する、兄弟だったら半年といった決まりがありました。もし決まりを破ったものなら「喪中なのにちゃらちゃらしちゃって」とか、後ろゆび指されるわけです。

このブローチは典型的な喪のジュエリーです。非常にきれいでしょう？ オペラとかお芝居といったお出掛けに着けるのにも相応しい美しさです。中のモザイクの部分は髪の毛で編まれている。故人を忘れないために、これだけ綺麗なブローチをつくらせたんですね。

そしてこのブローチのいいところは、言い訳ができる点。もし、劇場に出かけた時にうるさがたと鉢合わせしても、「わたしの愛する人はここにいます」と胸を張ってブローチを見せればいい。



喪のブローチ。ドーム状のガラスの下に髪の毛を編んだピースがセットされている。

こちらは葬儀用のブローチです。金でエメラルドが付いてとても華やかですね。日本人に見せると「葬式にこんな派手なブローチを着けていいの？」と言いますが、このパターンはいいんです。

見てください、手には手袋をしているでしょう？ 墓石に花を供える瞬間、あなたを悼んでいますよというモチーフです。

喪の決まりを免れるためにこんなふう知恵を絞ったんですね。喪中であってもやっぱりお洒落はしたいですから。



墓石に花を供える瞬間を表した葬儀用のブローチ。

この指輪は「ADORE(アドア)リング」です。使っている宝石はアメシスト、ダイヤモンド、オパール、ルビー、エメラルドで、その頭文字を並べると **ADORE** (敬愛する) になる。文字遊びですね。「これサファイアですよ、エメラルドですよ、綺麗でしょ」というだけの指輪ではなくて、文字遊びと宝石を絡めるところが、非常に洒落ていますよね。とてもセンスがいい。

文字遊びの指輪は **1800** 年代、ナポレオンの奥さんのジョセフィーヌが最初につくったと言われていました。フランスでは全然流行らなくて、イギリスで大流行しました。カップルで贈り合ったり、あなたとお近づきになりたいんですど、どうでしょ？という気持ちを込めて贈ったり。

他にも、ルビー、エメラルド、ガーネット、アメシスト、ルビー、ダイヤモンドを並べた「**REGARD** (尊敬する)」や、ダイヤモンド、アメシスト、ルビー、エメラルド、サファイア、トラピッチあるいはトパーズを並べた「**DEAREST** (最愛の人)」のリングもありました。



ADORE リング。宝石名の頭文字を取ると「ADORE（敬愛する）」になる。

……アンティークジュエリーの本家の国はどこでしょう？

イギリス、フランス、イタリアですね。イギリスのものは、がっちりと精密につくられています。フランスやベルギーのものは、おちゃらけているというか、デザイン的に非常に良くて遊びがある。イタリアのものは、さらにおちゃらけているけど、作りは綺麗ですよ。

たとえばこのフランスかベルギーのネックレス。単純に見ると3色金の蔦の葉です。でも、中から鏡が出てくる。首に下げていてちょっと口紅大丈夫かしら、なんて見たりする。遊び心ですね。



楕円形のトップ部分をスライドさせると、中から鏡が現れる

現代のアンティークジュエリーマーケットを見ると、圧倒的にイギリスのものが多いです。

なぜかという、1770年代に産業革命がいち早く起きて、大衆に向けたジュエリーのマーケットができたから。この時、フランスやドイツではまだ坊主だ貴族だの時代で、ふつうの人がジュエリーを買っていません。ようやく産業革命が起きたのは1850年を過ぎてから。イギリスとそのほかの国とではジュエリーの大衆化に100年弱の開きがあるわけですね。

……それより以前の貴族に向けたジュエリーと、以降につくられた、いわゆる新たな大衆に向けたジュエリーに違いはありますか？

まるで違います。アンティークジュエリーをお見せすると時どき「貴族のものですか」といわれますが、貴族のジュエリーはこんな作りではありません。貴族は日常生活では動かないですから、軽さや着け心地なんて一切関係なくて、見栄えがすべてです。

でも、アンティークジュエリーは、着けて動くことを前提としていますから、現代の女性にも大いに着けて楽しめます。ジュエリーの作り手や売り手にとっては、デザインも作りも大いに参考になる要素がありますよ。



インド、ムガル朝の金のブローチ。中央の宝石にはコーランが彫られている。
周囲の非常に精密な金細工はどうやってつくったのか不明。



ガーネットのブローチ。ガーネットはすべてボヘミア(現在のチェコ・スロバキア)産。



モスクのドームをモチーフにしたターコイズのブローチ。
イギリスの新規大衆に向けてトルコでつくられた。

アメリカ生まれが多い、ヴィンテージジュエリー

……アンティークジュエリーの延長線上に、「ヴィンテージジュエリー」があるかと思います。
これはどんなジュエリーでしょう？

アンティークジュエリーのマーケットで、1930年以前のもものが非常に品薄になってきました。そこで、1940年代後半から70年代後半頃までのものをヴィンテージジュエリーと呼んで、商品化していったんですね。

この時代は奇しくもアメリカ全盛ですので、アメリカ人のテイストに合ったものが多い。ウィンザー侯爵夫人に代表される、でっかくて目立って、がっちりとつくってあるようなもの。われわれの目から見るとちょっと繊細さに欠けるんじゃないのという向きもあるけれど、それでも、現代のものとは違う、それなりの面白さ、つくりの良さがあります。

……アンティークジュエリーを買うときは、どこをチェックしたらいいでしょう。

フェイクが非常に多いですからね。お店も悪意があってフェイクを売っているのではないことも多い。

ジュエリーは宝石や地金、つくりなどの組合せの品物ですから、チェックしなくてはいけない要素がなかなか多い。ジュエリーの勉強をせずにアンティークが好きという気持ちだけで商売を始めちゃった店は、ジュエリーであれば当然見るべきポイントをチェックしないで仕入れて、「ありゃあこんなもの扱っちゃってる」というところも多いように思います。とくに日本はね。

アンティークジュエリーをお買いになるときは、すぐには買わないで、まずはしばらくじーっと眺めましょう。そして、裏を見てください。整いすぎているものは現代につくられたフェイクである可能性が、どちらかというとき大きいです。

じーっと裏を見たり表を見たりして、自分がいいなとピンとくるものがあったら買う。それがたとえ間違っていたとしても勉強になります。僕だって間違えたことがありますよ。後から、「あれ、こんなところに何で刻印がついているんだ？」とかね。

……アンティークジュエリーが楽しめる、見る目を養えるおすすめの美術館はありますか？

イギリスの大英博物館の2階。部屋番号でいうと40番台、ここは絶対です。

同じくロンドンのV&A美術館（ヴィクトリア&アルバート博物館）、2階にジュエリーのセクションがあります。数は大英博物館より多いですね。

フランスのルーブル美術館にもあるにはありますが、フランス人の悪いところなんだろなあ。ちゃんと系統立てて展示していないから、見ていて効率がおそろしく悪い。それより、ルーブルの隣にある装飾芸術美術館（メゾン・ミュゼ・デュ・モンド）のほうがいい。

ウィーンでは王宮宝物館（シャツカマー）。数は少ないですけど、すごいものがあります。

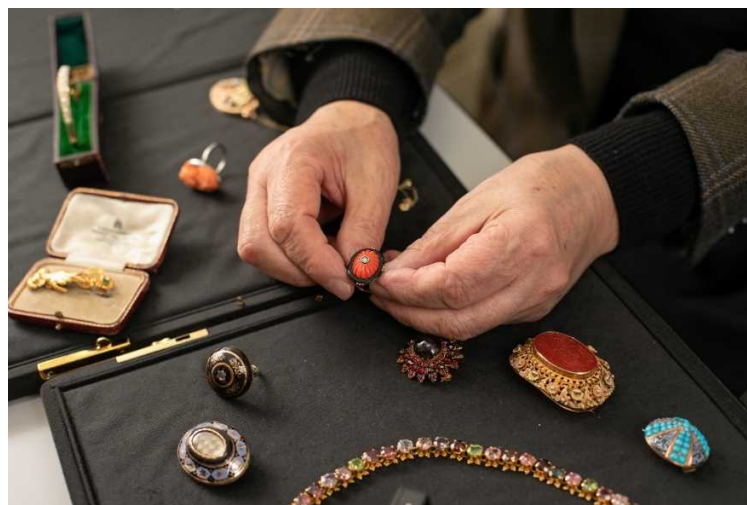
……美術館でジュエリーを見るときには、どんなふうに見たらいいでしょう。見るべきポイントは？

単眼鏡をもっていくと、宝石とかつくりとか細かいところまで見られるけれど、

それよりも全体像をパッと見たほうが役に立つと思う。綺麗なジュエリーを数多く見ると、ジュエリーの素人でも本当にいいものはある程度分かるようになりますよ。

人間の歴史をさかのぼると、ジュエリーは人間が始まって以来、**6000**年近く、ともに存在しています。これは人間がもともと「美」というものを感じる能力があればこそ。きれいな石とか羽根などで身を飾りたいといった、美を愛する本能のようなものがあるのでしょうね。

人間には美しいものを美しいと感じる力が本来は生まれながらにして宿っているのだと思います。たくさんの美しいジュエリーを見て、大いに美を感じて、美を見る目を育てていただけたらと思います。



山口氏のアンティークジュエリーコレクション。手に持っているのは珊瑚にダイヤモンドを埋めた指輪。その左下はべっ甲に金や銀などを象嵌したピクウェの指輪。